緩和ケアの連携を考える　～薬剤師の立場から～

京都桂病院　薬剤科　　中西　弘和　先生

　最近の癌治療はチーム医療であることが当然のように言われており、その中で、医師や看護師と同様に薬剤師もその職能を十分に発揮していくことが必要になります。当院で私たちは癌の病期が 3 期あり、治癒治療が可能な時期、癌が体にあるが治療が有効な時期、そして終末期と考えています。それぞれの時期に応じた治療やケアーを患者さんの意思を尊重しながら行うことが大切で、薬物治療の専門家として薬剤師が果たす役割はとても大きくなっています。特に在宅の終末期患者さんの多くが癌性疼痛に悩んでおられ、この点からも調剤薬局の薬剤師の積極的関与が必要と考えます。今まで厳しかった麻薬の受け渡しに関しても規制緩和がなされています。調剤薬局で処方箋と引き換えに麻薬を受け取ることが、患者さんの代理人である確認ができれば看護師やヘルパーでも可能になりました。また、調剤薬局に FAX を送れば、処方箋と引き換えることが絶対必要ですが、調剤薬局が患者宅に麻薬を配達してもよいことになりました。

　苦しまれている患者さんに何が出来るかを考え、その中から望まれる医療を提供することが大切です。

無断使用および転載禁止